挨　　拶

杉並区教育委員会教育長　**渋谷　正宏**

この度、令和６年度「杉並区中学生小笠原自然体験交流」事業は無事に第13期を迎え、22名の区内在住の中学生を自然豊かな小笠原へと派遣できましたこと、大変喜ばしく思います。

本事業は、「杉並区次世代育成基金」のご支援のもと、世界自然遺産である小笠原の貴重な自然と文化に触れることで、子どもたちの豊かな人間性を育み、持続可能な社会を考える環境リーダーを育成することを目的としています。

派遣生徒たちは、事前の学習会で小笠原の魅力や多様性を深く学び、自ら課題を設定し、グループでの対話を通じて解決策を具体的に検討しました。その中で、互いの学びを深め、現地の活動では真剣に耳を傾け、積極的に質問する姿が多く見られました。

東京都でありながら24時間もの船旅を経て辿り着く小笠原では、杉並区内では決して味わえないかけがえのない体験ができました。小笠原諸島に生息する生き物、美しい海や森、独自の気候など、実際に見て、知り、感じることで、子どもたちは自然の偉大さとその保全の重要性を肌で感じたことでしょう。ホエールウォッチングやネイチャーガイド、南洋踊りやフラダンスの体験、そしてビーチクリーン講習などを通じて、小笠原の人々が自然を守り育む取組や想いに触れ、深く理解でき、彼らの心に深く刻まれたはずです。

現地での貴重な経験を終え、生徒たちは事後学習会で一人ひとりの研究成果や想いをまとめた報告書を作成しました。特に、環境保全に関して自身がすべきことを「環境リーダー宣言」として明確にし、具体的な行動へと移すことの大切さを実感できたことと思います。

本事業を通じて、未来を担う子どもたち一人ひとりが、さまざまな環境問題を自分ごととして捉え、広い視野をもって自然について考え、多様な人々と協力しながら豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となってくれることを心より期待しています。

最後に、本事業の実施にご理解とご協力を賜りました小笠原村をはじめ、ご尽力いただいた関係者の皆様、そして「杉並区次世代育成基金」を通じて温かいご支援をくださいました寄付者の皆様に、心より感謝申し上げます。皆様のご支援とご協力なくして、この事業を成功させることはできませんでした。本当にありがとうございます。

思い出写真館 MEMORIES OF OGASAWARA

結団式

事前学習会

1日目

3月19日(水)

出発・おがさわら丸乗船

9：00　竹芝客船ターミナル
　　第2待合所集合／乗船手続き
9：30　出発式
10：00　おがさわら丸乗船
12：00　昼食
18：00　夕食
22：00　消灯

出発式

2日目

3月20日(木)

歓迎セレモニー、
シュノーケルレッスン、避難訓練

5：00　日の出見学
6：30　起床
7：30　朝食
11：00　小笠原着・歓迎セレモニー
11：50　入宿式
12：00　昼食
13：30　シュノーケルレッスン(宮之浜)
18：00　夕食
19：00　避難訓練・天体観測
22：00　消灯

日の出見学

歓迎セレモニー

入宿式

シュノーケルレッスン（宮之浜）

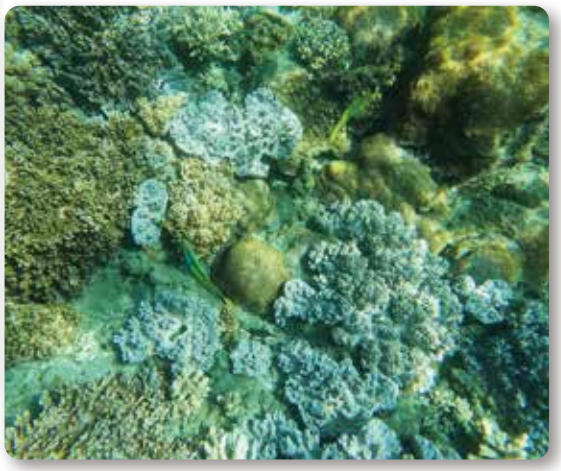
3日目

3月21日(金)

海の自然体験活動

6：00　起床
7：10　朝食
8：30　海の自然体験活動
　　昼食
　　兄島海域公園(シュノーケル体験)
　　ホエールウオッチング
18：00　夕食
19：00　南洋踊り体験
22：00　消灯

海の自然体験活動



南　島

南洋踊り体験

4日目

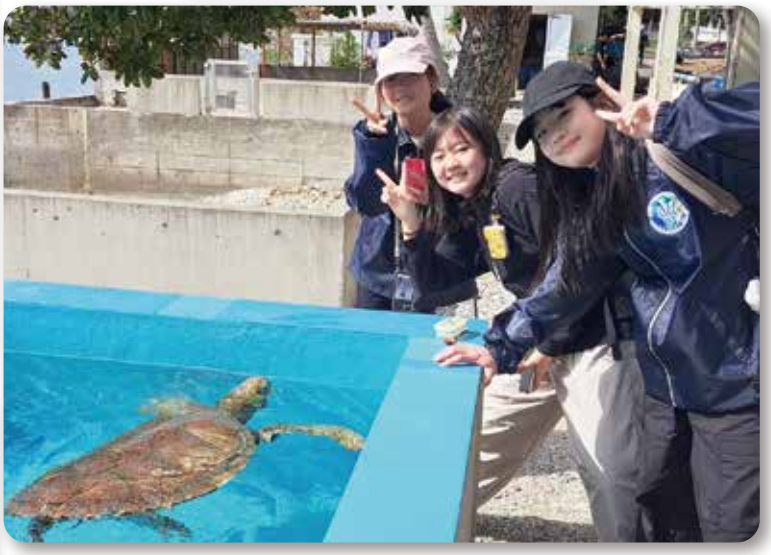
3月22日(土)
自然と歴史の見学

6：00　起床
7：00　朝食
8：30　小笠原の自然と歴史見学
　　ウェザーステーション、三日月山、境浦、
　　洲崎、コペペ海岸、中央山、
　　東平アカガシラカラスバトサンクチュアリ、
　　長崎展望台、小笠原海洋センターなど
12：30　昼食
14：30　ビーチクリーン講習
18：00　夕食
19：00　フラダンス体験
22：00　消灯

自然と歴史見学

ウェザーステーション、
長崎展望台等

小笠原海洋センター、コペペ海岸、
東平アカガシラカラスバトサンクチュアリ等



ビーチクリーン講習

フラダンス体験

5日目

3月23日(日)

施設見学、見送りセレモニー、乗船

6：30　起床
7：00　朝食
8：00　退宿式
8：30　施設見学(小笠原ビジターセンター、小笠原世界遺産センター)
9：30　散策・お土産購入(昼食含む)
14：00　見送りセレモニー
14：30　乗船
15：00　二見港出港
18：00　夕食
22：00　消灯

退宿式

施設見学(小笠原ビジターセンター)

施設見学(小笠原世界遺産センター)

見送りセレモニー

6日目

3月24日(月)

到着式

5：20　日の出見学
7：00　起床
7：30　朝食
12：00　昼食
14：30　下船準備
15：00　竹芝港着
15：15　竹芝客船ターミナル到着式
15：30　解散

帰路船内

竹芝港着　到着式

目　　次

杉並区教育委員会教育長 挨拶……1

思い出写真館……2

目　次……17

Ⅰ　杉並区中学生小笠原自然体験交流事業の概要……18

Ⅱ　派遣団(中学生)の報告

外来種の対策や固有種をどう守っているのか……杉並区立杉森中学校　第1学年　飯　村　桃　子…20

小笠原 ～私たちへのメッセージ～……杉並区立杉森中学校　第1学年　荻　野　季　一…21

小笠原の固有種を脅かす外来種……杉並区立松溪中学校　第1学年　藤　川　弥太郎…22

海洋プラスチックが及ぼす影響とは……杉並区立松溪中学校　第1学年　鷲　尾　　武…23

自然災害と環境の関わり……杉並区立天沼中学校　第2学年　鈴　木　捺　希…24

自然環境の未来への責任……杉並区立天沼中学校　第1学年　山　﨑　　櫂…25

小笠原の貴重な固有種を外来種から守るために……杉並区立中瀬中学校　第1学年　市　川　　碧…26

固有種の進化とサンクチュアリについて……杉並区立中瀬中学校　第1学年　古　野　　杏…27

小笠原での外来種の影響と外来種への対策……杉並区立井荻中学校　第1学年　及　川　和　花…28

外来種による小笠原の固有種の危機を考える……杉並区立井荻中学校　第1学年　長　谷　　駿…29

小笠原に行き学んだこと……杉並区立井荻中学校　第1学年　松　永　想　大…30

小笠原のマイマイを守るには……杉並区立井草中学校　第1学年　俵　　俊太郎…31

五感で感じる小笠原……杉並区立神明中学校　第1学年　久　野　水　歌…32

小笠原の固有種の保全活動について……杉並区立高井戸中学校　第2学年　玉　置　朱　璃…33

小笠原の固有種の生態、保全活動について……杉並区立松ノ木中学校　第1学年　宮　田　紗　羽…34

アオウミガメの生態とそこから学ぶ海の環境問題……杉並区立泉南中学校　第2学年　斎　藤　心　愛…35

自然と人の共存……杉並区立西宮中学校　第2学年　小　林　真由香…36

小笠原の生物の保護について……杉並区立西宮中学校　第1学年　ﾎﾞｰｹﾞﾝｼｭﾙﾂ ｼﾞｬｽﾊﾟｰ海…37

素晴らしい小笠原独自の自然を今後残していくために……杉並区立高円寺学園中学部　第3学年　今　井　　力…38

小笠原の生態系とその変化について……渋谷教育学園渋谷中学高等学校　第1学年　綱　島　実　咲…39

小笠原に流れ着く海洋プラスチックごみの量と産地について‥東京大学教育学部附属中等教育学校　第2学年　藤　井　誠　人…40

環境保護と小笠原諸島の観光客との関わり…東京大学教育学部附属中等教育学校　第2学年　峰　田　百　々…41

Ⅰ　杉並区中学生小笠原自然体験交流事業の概要

1　目　的

⑴　世界自然遺産である小笠原の貴重な自然の中での体験学習や現地の方々との様々な交流を通して、子どもたちの豊かな人間性を育む。

⑵　各学校・地域における環境保全活動の推進役となる世界的視野で持続可能な社会を考えることができる生徒を育成する。

2　派遣期間及び派遣先

⑴　派遣期間

令和7年3月19日(水)～3月24日(月)【5泊6日(内 船中泊2日)】

⑵　派遣先

東京都小笠原村

3　派遣団一覧

【派遣生徒】　学年及び学校は派遣時点

No.	氏　名	学年	学　　校	No.	氏　名	学年	学　　校
1	飯　村　桃　子	1	杉並区立杉森中学校	12	俵　　俊太郎	1	杉並区立井草中学校
2	荻　野　季　一	1	杉並区立杉森中学校	13	久　野　水　歌	1	杉並区立神明中学校
3	藤　川　弥太郎	1	杉並区立松溪中学校	14	玉　置　朱　璃	2	杉並区立高井戸中学校
4	鷲　尾　　武	1	杉並区立松溪中学校	15	宮　田　紗　羽	1	杉並区立松ノ木中学校
5	鈴　木　捺　希	2	杉並区立天沼中学校	16	斎　藤　心　愛	2	杉並区立泉南中学校
6	山　﨑　　櫂	1	杉並区立天沼中学校	17	小　林　真由香	2	杉並区立西宮中学校
7	市　川　　碧	1	杉並区立中瀬中学校	18	ﾎﾞｰｹﾞﾝｼｭﾙﾂ ｼﾞｬｽﾊﾟｰ海	1	杉並区立西宮中学校
8	古　野　　杏	1	杉並区立中瀬中学校	19	今　井　　力	3	杉並区立高円寺学園中学部
9	及　川　和　花	1	杉並区立井荻中学校	20	綱　島　実　咲	1	渋谷教育学園渋谷中学高等学校
10	長　谷　　駿	1	杉並区立井荻中学校	21	藤　井　誠　人	2	東京大学教育学部附属中等教育学校
11	松　永　想　大	1	杉並区立井荻中学校	22	峰　田　百　々	2	東京大学教育学部附属中等教育学校

【引率者等】　所属及び職は派遣時点

氏　名	所属・職	氏　名	所属・職
伊　井　希志子	杉並区教育委員会 教育委員	井　上　雅　淑	杉並区立高円寺学園 教諭
清　水　里　恵	杉並区立済美教育センター 統括指導主事	石　田　和　也	杉並区立済美教育センター 教育指導係
三　浦　　哲	杉並区立済美教育センター 指導主事	民間派遣看護師１名	
梅　林　伸　幸	杉並区立済美教育センター 指導主事		

Ⅱ　派遣団（中学生）の報告

外来種の対策や固有種をどう守っているのか

■杉並区立杉森中学校　第1学年　**飯　村　桃　子**

1　「外来種の対策や固有種をどう守っているのか」

⑴　個人テーマ設定の理由

小笠原で外来種が問題になっていることに強く興味をもった。外来種の影響で、小笠原諸島に元々いた固有種の数がとても減っており、外来種を増やさないための対策や固有種をどう守っているのかを知りたいと思ったからである。

⑵　事前学習で学んだこと

小笠原では、固有種のあかぽっぽや海鳥などの野鳥が、ノネコにより、絶滅の危機に瀕していたため、ノネコの捕獲活動が始まった。野鳥もノネコも助けるため、ノネコをかご罠で捕まえ、殺処分せずに、新しい飼い主を探す活動をしており、その結果、ノネコの数が減り、野鳥も増えてきていることを知った。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　新たな外来種を入れないための取組

外来種を侵入させないため、おがさわら丸の乗下船時に靴底洗浄マットや、種子やプラナリア等を拡散させないための保護区域入口などに種子除去装置（写真1）や木酢スプレーを設置などの取組を知った。

【写真1】種子除去装置

【写真2】ノヤギやノネコの侵入防止柵上にいたグリーンアノール

②　入ってしまった外来種への対応

ノヤギやノネコの侵入防止柵やグリーンアノール用粘着トラップが設置されていたが、侵入防止柵上にいたグリーンアノール（写真2）を見て、生き物ごとに対策しなければならない難しさを感じた。

③　固有種を増やす活動

保護増殖室などで固有のカタツムリなどの繁殖の手伝いや、柵の設置による固有種が増える環境づくりなどを行っていることを学んだ。

2　環境リーダー宣言　「貴重な風景や生き物を守るために」

意図せず、外来種となる動物を連れていってしまうことがあるが、人が手放した動物が外来種として原因になっている場合がたくさんあることに気付いた。長い間、天敵のいないところで進化した無防備な固有種は、簡単に食べられる側になり、絶滅まで追い込まれてしまう。

ここでしか見られない貴重な風景や生き物を守るために、一人ひとりの心がけで変われることもたくさんあると思う。私自身、猫を飼っているが、気軽に持ち込んだり手放したりせず、最後まで責任をもって世話をしていきたい。

3　参考文献、資料

・小笠原ネコプロジェクトHP　https://www.ogasawaraneko.jp/
・小笠原世界遺産センターHP　https://ogasawara-info.jp/about-world/efforts/

小笠原 ～私たちへのメッセージ～

■杉並区立杉森中学校　第1学年　**荻　野　季　一**

1　「世界遺産である小笠原を守っているのは、どのような人たちで、またどのように守っているのか」

⑴　個人テーマ設定の理由

小笠原は世界自然遺産に登録されており、固有種や絶滅危惧種も多い。その中で、その豊かな自然を守るために、どのような人たちが、どんな思いで活動しているか気になった。また、小笠原に訪れる者として、ルールやマナーを守り、これからの環境保全につなげていきたいと思ったからである。

⑵　事前学習で学んだこと

事前学習では、小笠原村観光局の方から、小笠原の特徴や文化などの大まかな説明をしていただいた。最初は小笠原の大自然に触れてみたく応募したが、話を伺ううちに、小笠原の人々の生活について知りたいと思うようになった。また、メンバーと協力してグループテーマ「自然と人々の関わり」について考えを深めることができた。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　世界自然遺産である小笠原の自然について調べてみると、その自然を守っていたのは現地の人々だけではないことが分かった。

・現地の住民（ネイチャーガイドやボランティアの人々）
・NPOなどの支援団体（募金・寄付やウミガメの飼育などをしている人々）
・私たち（小笠原を訪れる人々）

中でも驚いたことは、私たちも関わっているということである。小笠原の自然をよりよくしていくため、環境リーダーとして全力で還元していきたい。

②　多くの人に守られている小笠原について、ネイチャーガイドの方に話を聞くと、ガイドさん自身が行っている主な活動は小笠原のネイチャーガイドなどを通して小笠原を知ってもらうことやビーチクリーン講習のコーチ、サーフィンやカヤックのコーチだった。小笠原の人々はそれぞれの立場でできる形で環境保全に関わっている。

ネイチャーガイドの方による案内の様子

2　環境リーダー宣言　「半径1メートルから環境保全‼～より良い地球へ～」

今回、杉並区の代表として小笠原に派遣され、その豊かな自然と迫る危機について学び、深く興味をもった。今､地球は大きな危機に瀕している。しかし､中学生である私ができることは限られている。そのため、これからの地球を守るために、周りの人に自分が体験してきたこと、今地球はどのような危機に瀕しているかなどの現状を発信し、環境保全の第一歩を踏み出していく。

3　参考文献、資料

・小笠原村公式HP　https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/kankyo/kankyo_keihatsu/
・環境省HP　https://www.env.go.jp/info/iken/h191014a/a_3_2.pdf

小笠原の固有種を脅かす外来種

■杉並区立松溪中学校　第1学年　**藤　川　弥太郎**

1　「小笠原の特定の外来種が脅かしている実態」

⑴　個人テーマ設定の理由

生き物が好きで、小笠原の固有種について知ったときに行ってみたいなと思った。固有種が外来種の影響でいなくなってしまうと考えると、とても深刻な問題である。また、小学生の頃に小笠原の固有種について学び、その際外来種が生態系を破壊しているという現状を聞いたからである。

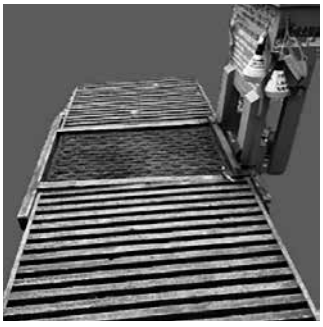
⑵　事前学習で学んだこと

3種の外来種について調べた。1種目のクマネズミは、雑食で固有の陸産貝類を食べる厄介な動物である。陸産貝類は室内で繁殖させて、現在は数が増えてきた。2種目のノヤギは、外来植物を根絶やしにするために連れてこられたが、1匹の食べる量が多過ぎることが問題である。固有植物が豊富な東平地区ではノヤギの防止柵を設置している。3種目のグリーンアノールは、特定外来生物で小笠原シジミなど固有昆虫などを食べてしまう。2013年には昆虫の豊富な兄島にも生存が確認され、危惧されている。グリーンアノールを捕まえたら1匹50円のアルバイトや罠など様々な対策をとっていた。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　小笠原では僕たちが想像していた以上に様々な対策をとっていた。例えば兄島に毎日行き、グリーンアノールを捕まえに行ったり、サンクチュアリと呼ばれるところではプラナリアなどの対策で酢のスプレーを足の裏にかけ、種子などを除去したりしていた。ここまで一生懸命になるのは美しい大自然などを守るために必要不可欠なことだと思った。

②　他にも小笠原ではノネコも問題になっていてノヤギと同様に防止柵が建てられている。その他に罠がたくさん仕掛けてあり、ガイドの方によるとその数はなんと500であった。しかし、父島全土にある500もの罠は1日に回収できないため、使う罠とそうではない罠を決めるなど、臨機応変に対応しているそうだ。しかし、グリーンアノールなどの小動物の対応はなかなか難しいため、困っているそうだ。



種子除去装置

2　環境リーダー宣言

「身の回りのゴミ捨てなどから環境に優しくすることを周りの人に伝える」

小笠原では、美しい自然を守るために島民の方々が一生懸命頑張っていることに感銘を受けた。杉並は残念ながらあそこまでの自然はない。しかし、自分の身の回りの自然を守ることができる環境リーダーにならなければいけない。今後、さらにごみなどが増え、空気が汚れてしまうと小笠原にも影響が及ぶ。そうならないよう、近所の方々に分別を要請するポスターをゴミ捨て場に貼るなど、私たちが率先して環境を守っていく。

3　参考文献、資料

・「外来種対策のお願い」　https://ogasawara-info.jp/visit/about-alien/
・「小笠原諸島：保護管理・日本の世界自然遺産」
https://www.env.go.jp/nature/isan/worldheritage/ogasawara/measure/index.html

海洋プラスチックが及ぼす影響とは

■杉並区立松溪中学校　第1学年　**鷲　尾　　武**

1　「小笠原における海洋プラスチックの現状と対策」

⑴　個人テーマ設定の理由

私の個人テーマ設定理由は二つある。

一つ目は、都市から約1,000㎞離れた島に海洋プラスチックが及ぼす影響は何か気になったからである。二つ目は、海洋プラスチックが及ぼす影響を都市に住む人に知ってもらい、海洋プラスチック削減に取り組んでほしいと思ったからである。

⑵　事前学習で学んだこと

事前学習では、小笠原の面積や人口など小笠原そのものについて学んだ。

具体的には、小笠原諸島の中で、主に人が住んでいる父島と母島の面積は杉並区の34.06㎢より、9.27㎢広い、43.33㎢である。また、人口は杉並区の57万人のおよそ230分の1の約2,400人であり、小笠原はとても人口密度が低いと分かった。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　近年、小笠原ではホエールウォッチングで見える鯨の数も減ってきていたり、海ガメの産卵場所が減ってきたりしている。現地の人は、都市に住む人に対してプラスチックごみを拾うなど、少しでもプラスチック削減に取り組んでほしいと話していた。現地の方の話を聞き、私は、まずは学校に落ちているごみなど、身近に落ちているごみを拾っていくことが大切だと思った。

②　小笠原の浜には日本の製品以外にも世界中からごみが流れ着くという現状について、現地の人に意見を聞いたところ、「世界中の人々の中にはごみの捨て方などを知らないという状況もあることが、海洋プラスチック増加の原因の一つである。そのため、ごみの捨て方を知らない人々に、政府やごみの正しい捨て方を知っている私たちが教えるべきだ。」と言っていた。私はこの話を聞き、日本でも正しくごみを捨てられていない人に対して、しっかりと正しいごみの捨て方を教えていこうと思った。

ビニール袋（漂流物）

ペットボトル（漂流物）

2　環境リーダー宣言　「海洋プラスチック削減のために、すぐにできることを行う」

私は小笠原自然体験交流を通して、海洋ごみが増え続ける理由は人々がエコバッグを使わずにビニール袋を使っていたり、ごみを正しく捨てていない人に対してその場ですぐに正しいごみの捨て方を教えていなかったりと、すぐにできることを行っていないからだと思った。私はごみを減らすために最も重要なことは、今すぐにできることを行っていくことだと思うため、何事も先延ばしにせず、取り組んでいきたい。

3　参考文献、資料

・杉並区公式ホームページ　https://www.city.suginami.tokyo.jp/s010/2089.html
・東京都総務局　https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/07ogasawara/guidance/summary

自然災害と環境の関わり

■杉並区立天沼中学校　第2学年　**鈴　木　捺　希**

1　「自然災害がもたらす環境への影響」

⑴　個人テーマ設定の理由

近年、日本全体で豪雨や威力を増した台風、地震など、人の力では防ぐことのできない自然災害や地球温暖化、異常気象が増えている。そこで、そのような自然災害などが小笠原諸島にどのような影響をもたらしているのか、そして実際の対策方法や海洋島ならではの問題点をさぐり、生態系や世界遺産保護への取組についても、その影響があるのか調べてみたいと思ったからである。

⑵　事前学習で学んだこと

小笠原諸島は東京都から南1,000㎞に位置し、30ほどの島々からなる。世界自然遺産に登録されていて、小笠原ならではの生態系や固有種が魅力的である。そして、外来種対策も厳重にされている。また、自然保護のため飛行場がなく、船で24時間かかる。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　小笠原諸島では台風による倒木が頻発し、森林の生態系や観光施設に影響を与えている。倒木の対策として、事前の森林整備や強風に耐えうる樹木の選定が求められる。また、倒木後は速やかな撤去作業や復旧活動が必要である。このようにして、自然環境の保護と地域経済への影響を最小限に抑えようとしている。

②　地震や台風、豪雨などの災害発生後には、外来種の侵入や拡大がないかを確認するため、環境省や研究機関が生態系モニタリングを行っている。特に土砂崩れや倒木によって地面が露出すると、外来植物が根付きやすくなるため、早期発見が重視されている。また、災害後の復旧や支援活動により、本土や父島から物資や人員が運び込まれる時に、外来種が入り込まないように対策が行われている。

南島（扇池）の景観

2　環境リーダー宣言　「自然災害が最小限にとどまるよう、自分たちにできることから発信する」

貴重な小笠原の自然や生態系が、自然災害や外来種の侵入によりに変化することが最低限にとどまるよう、小笠原諸島や東京都のみならず、日本及び世界の自然災害、環境問題につながる行動に移し、身近なところから発信していく。便利な世の中になり、得たものと引き換えに、失うものがあるかもしれないと一度立ち止まり、一人ひとりが意識することが大切である。

これらの行動が小笠原諸島固有の自然を守る一歩にもなると考えたからである。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

自然環境の未来への責任

■杉並区立天沼中学校　第1学年　**山　﨑　　櫂**

1　「自分の行動に責任を持つ」

⑴　個人テーマ設定の理由

グリーンアノールは、人間のせいで小笠原に解き放たれてしまい、環境を破壊している。人が責任をもって未来を見据えて行動すれば起こり得なかったことである。また、海洋ごみによって生物が傷つけられるということも、ごみを海に捨てた一人ひとりが責任をもって行動すれば起こり得なかったことだと思ったため、このようなテーマにした。

⑵　事前学習で学んだこと

小笠原諸島は、大陸と一度も地続きになったことがないため、海を越えてたどり着いた生物は独自の進化を遂げてきた。父島では、環境保全活動として上陸する際にプラナリアなどの外来種を島内に持ち込まないためのマットを置いていることが分かった。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　外来種はどのように侵入し、繁殖するか

外来種の多くは流木などに乗り、種や実が運ばれてくる。そして小笠原諸島に住みつき、繁殖して増える。特に固有種に被害を及ぼすのはグリーンアノールであり、小笠原の昆虫類の固有種を食べてしまう。とても素早く体も小さかったため、駆除をするのは困難だと思った。

グリーンアノールの大きさ

②　固有種を守るためにどのような取組をしているか

固有の自然が多く残る南島では、「島内に入る前に足を洗う」、「草むらや地層が残る斜面には足を踏み入れてはいけない」などの徹底したルールがあった。徹底した保護活動が固有種や自然そのままの地形を守ることにつながるのだなと思った。ネイチャーガイドの方に外来種に対する思いを聞くと、「外来種の中にも害があるもの、ないものがある。元の自然に戻すのも大事だし、外来種も生き物だから互いに良い方向にもっていけるようにすみ分けることができたらと考えている。」と答えてくれた。外来種も生き物なので、ただ駆除をするだけでは解決策にはならないと思った。

2　環境リーダー宣言　「自然を守るために発信する」

小笠原にいざ行ってみると、事前学習では調べきれなかったことやたくさんの課題があることが分かった。ネイチャーガイドなど現地の方に話を聞くと、また違った視点での自然環境に対する思いなどが知ることができた。そして、人間の生み出したごみが水や風に運ばれてカメを苦しめていると知った。だから、学習発表の場など様々な機会を通じて、杉並から小笠原の自然の美しさや環境保全活動について発信し、小笠原に関心をもってもらい、活動の輪を広げて行きたいと思う。

3　参考文献、資料

・歴史　小笠原村公式サイト　https://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/history/

小笠原の貴重な固有種を外来種から守るために

■杉並区立中瀬中学校　第1学年　**市　川　　碧**

1　「小笠原の固有種の現状」

⑴　個人テーマ設定の理由

小笠原に行くことが決まり、改めて調べてみたら、小笠原には100種類以上の固有種がいることが分かり、興味をもった。また、固有種が外来種に食べられることで数が減っていることが分かり、そのことについても詳しく知りたいと思った。

⑵　事前学習で学んだこと

小笠原村観光局の方の話から、小笠原の在来種（100数種類）の94%が固有種であることが分かった。また、外来種のほとんどは人間が意図せずに持ち込んでおり、特に靴の裏などについていることが多い。そのため、島などに入る前に靴の裏を除菌することが大切である。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　固有種の紹介など

小笠原諸島は、島の誕生以来、大陸と陸続きになったことがない海洋島であることから、固有の動植物が多く生育・生息している。代表的な固有植物に「たこの木」があり、父島のあらゆるところで見られた。「ムニンヒメツバキ」「ムニンツツジ」などの名称は、小笠原が古く「無人列島」と呼ばれていた所以である。

②　外来種について

外来種の侵入により生態系は深刻な影響を受けている。国立公園は、アカガシラカラスバトという固有種の重要な繁殖地となっている。諸島内で100羽程のため、侵入防止柵を設置しノヤギやノネコの侵入を防いでいる。

また、外来種のグリーンアノールを中心に毎日兄島に人が渡り駆除している。小動物は見つけにくいため非常に駆除が難しい。

たこの木

国立の侵入防止柵

2　環境リーダー宣言　「外来種を持ち込まないようにするよう呼びかける」

外来種のほとんどは人の手によって持ち込まれており、人が持ち込まなければ絶滅しない固有種もいるはずだから、全員が注意をすることが必要である。具体的には、小笠原に入るとき船の前に置いてあるマットで靴の裏の汚れを落すことだ。でも、それを知らずに通り過ぎる人もいると思うため、私たちが学校の新聞などで身の回りの人などに教えてあげることによって外来種の侵入を防ぐようにする。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

固有種の進化とサンクチュアリについて

■杉並区立中瀬中学校　第1学年　**古　野　　杏**

1　「固有種の生態と保全活動」

⑴　個人テーマ設定の理由

西表島に行った際、西表島の固有種の生態を知った。その際、固有種を守るための取組で、モニタリングをしたり、動物専用のトンネルなどを作ったりしていた。小笠原にはどのような固有種がいて、どのような取組をしているのか興味をもったからである。

⑵　事前学習で学んだこと

小笠原諸島は2011年に世界自然遺産に登録され、緯度は沖縄と同じくらいである。また、ペリーが下田を訪れる前、小笠原に立ち寄った歴史がある。そして、太平洋戦争で強制疎開があり、23年間小笠原に戻れない時間が続き、小笠原諸島の人口が著しく減少した。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　小笠原の固有種は退化ともいえる進化をしていた。例は小笠原のサルトリイバラだ。本来サルトリイバラには身を守るための棘があるが、小笠原のものに棘はない。これは小笠原に天敵が存在しないため、身を守る必要がないからであった。他にもアメンボが空を飛べなくなるという進化をした。このように小笠原の固有種は独自の進化を遂げていた。

②　固有種であるアカガシラカラスバトの保護区をサンクチュアリという。そして保護区一体を囲っている柵がある。柵の素材は網にステンレス、柱にはカーボンと強い素材が使われているが、ノネコを保護区に入れないためだ。また、固有種を食べるプラナリアの侵入を防ぐ靴裏の消毒、保護区に入った人が保護区内の様子を書くボードの設置など工夫がされていた。

靴裏の消毒

石の種類によって来場者の属性が分かる

2　環境リーダー宣言　「私は固有種の生態を守るために積極的に小笠原での体験を周りの人に広め、固有種を守る取組をしていきたい」

この宣言にしたのは、私の学校に来られたごみ清掃員を職とした芸人の滝沢さんから環境についての話を聞いたことが影響している。滝沢さんは地球の現状と取組、私たちのすべきこと、向き合い方を教えてくださった。そして、実際に小笠原に行ったことで、私にとっての環境への向き合い方が見つかった。だから、私もそのように校内の発表の場などを通じてたくさんの人に広めていく。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

小笠原での外来種の影響と外来種への対策

■杉並区立井荻中学校　第1学年　**及　川　和　花**

1　「小笠原で外来種が固有種に与える影響と固有種を守ための対策」

⑴　個人テーマ設定の理由

学校で小笠原について調べる授業があり、小笠原にたくさんの固有種がいること、外来種によって固有種が絶滅の危機にさらされていることを知った。そして、小笠原の固有種を守りたいと考え、このテーマにした。

⑵　事前学習で学んだこと

小笠原村観光局の方から、小笠原の場所や人口など基本的な情報を教えてもらった。また、小笠原の生態系に影響を及ぼすノネコを捕獲した後、殺処分せずに保護し、飼い猫として本土に連れてくる活動についても知った。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　小笠原では固有種を保護するため、広範囲が自然保護区域になっている。保護区域は柵が設置されていて、ノネコやノヤギの侵入対策をしていた。保護区域内にはローラーやマット、プラナリア対策の木酢スプレーなどの外来種除去装置が設置されていた。また、松など侵略性の高い植物を薬で人工的に枯らして駆除するなど、たくさんの外来種対策をしている。

外来種除去装置

②　外来種であるグリーンアノールは小笠原の固有種の昆虫を食べてしまうため、小笠原固有種の昆虫の数の減少につながってしまっていることを学んだ。宿の近くや保護区域の柵にもいて、その深刻さが分かった。体の色を変えることができ、小さく、動きも速く捕まえることは大変だとガイドの人に教えてもらった。対策として、トラップによる捕獲などが行われているということも教えてもらった。

2　環境リーダー宣言　「生き物を守るために、自分たちにできることを発信する」

小笠原自然体験交流で、人間の持ち込んだ外来種によって固有種が脅かされていることを学び、これは小笠原だけでなく、どんな場所でも起こることだと気付いた。例えば、飼育していた動物を捨てると野生化することもあり、元から暮らしていた動物にまで影響を及ぼすこともある。自分たちにできる身近なことをたくさん学習発表の場など様々な機会を通して発信していく。

3　参考文献、資料

・外来種対策のお願い　小笠原世界遺産センター
・グリーンアノール対策は今！　小笠原世界遺産センター
・外来植物駆除　東京都小笠原支庁

外来種による小笠原の固有種の危機を考える

■杉並区立井荻中学校　第1学年　**長　谷　　駿**

1　「外来種の影響と対策」

⑴　個人テーマ設定の理由

小笠原では、自分たち人間の不注意によって持ち込まれた外来種により、固有種が生存競争に負けるなどして数を減らしている。また、小笠原の自然が外来生物により、減少しつつある。小笠原の自然などをこれからも持続させていくため、小笠原が取り組んでいる対策、自分たちができることについて知りたいと思い、このテーマにした。

⑵　事前学習で学んだこと

外来種は、もともとは人間により持ち込まれ、生きるためにしかたなく生物を捕食したりしていることが分かった。また、一番驚いたことは、靴の裏が「一番」の外来種の媒介の原因ということだ。靴の裏に付いた土の中に種子があるなど、考えもしなかった。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　自然保護区域

現地には、実際に固有種を守るために自然保護区域というものが設けられている。自然保護区域内には、ムニンノツツジなどの固有種があった。その場所に入る前には、必ず木酢液を足の裏にかけ、種子除去装置（粘着ロールクリーナー）で服をきれいにする。しかし、保護区域内にもクマネズミがおり、新芽などを食べてしまっていた。殺鼠剤（さっそざい）などで対策はしているものの食害が絶えないそうだ。

②　南島、ビーチなどの生物を守る取組

海の自然体験で南島に上陸するには、種子を持ち込まないために、足の裏を海水や薬品などで消毒してからボートに乗り、ガイドの方の同行も必須だった。シュノーケリングでも、くもり止めには、サンゴが死なないように唾を使った。海洋センターでは、町に近いビーチのウミガメの卵を回収し、孵化させる取組もある。このように「貴重生物を守る」という共通認識が小笠原にはある。

グリーンアノール

海洋センターのウミガメ

2　環境リーダー宣言　「外来種をこれ以上増やさないため『持ち込み』の影響を発信する」

グリーンアノールやノネコ、クマネズミなどは人間によって持ち込まれた「外来種」である。それらが外来種となった原因は、ノネコやグリーンアノールはペットとして、クマネズミや多くの植物は不注意で持ち込まれてしまった。現地の対策はトラップや殺鼠剤（さっそざい）があるが、観光客の意識が薄ければ持ち込みが増えてしまう。特にノネコは元々ペットとして持ち込まれ、逃げる、もしくは放すことが後を絶たないという。こうした影響を学校などで報告の機会を設けたり、自分でポスターを作ったりして発信することにより、みんなの意識を高め、故意や不注意による持ち込みも防いでいきたい。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

小笠原に行き学んだこと

■杉並区立井荻中学校　第1学年　**松　永　想　大**

1　「小笠原のアリと好蟻性生物」

⑴　個人テーマ設定の理由

小笠原のアリと好蟻性生物は固有の種類もいて、とても興味深いと思ったからである。アリの固有種というのは種類が少なく、特定の場所にしかいない。しかし、日本の固有種はとても面白い種類が多く、実際に見て、観察し、生態を研究してみたいと思った。

⑵　事前学習で学んだこと

事前学習では、小笠原の自然やどのような歴史があるのか、なぜこんなにも多くの固有の生き物がいるのかということなどを学んだ。また、小笠原固有のアリについてはオガサワラオオアリ、オガサワラハリアリという種もいるということが分かった。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　ウミガメの歴史

小笠原のカメは過去に大量に捕獲され、漁獲量が一時期数十頭にまで落ち込んだ年があった。そこで、小笠原海洋センターが設置された。そこでは、ウミガメの生態の研究、繁殖をしている。そして、今では海洋センターの協力もあり、年間135頭という漁獲量の上限が決められた中で生息数が復活してきている。

②　小笠原の観光業は、ホエールウォッチングやドルフィンスイムがある。そしてそれを行うときにはイルカやクジラを守るためのルールがある。例えば、クジラから300mは減速水域になっているということや、イルカの一つの群れに対しては大小問わず4隻までしかアプローチできないということなどである。つまり、クジラやイルカと共存しているということに感動した。

ザトウクジラの親子

2　環境リーダー宣言　「外来種問題について自分たちにできることを発信する」

なぜ私がこのような宣言をしたかというと、侵略的外来生物が日本の在来種の生態系を脅かしているからである。侵略的外来生物とは小笠原にいるグリーンアノールなどが挙げられる。このまま外来種に対する対策を取らないと、より多くの在来生物が犠牲になる。だから、外来種問題の深刻さや、どのような取組ができるのかについて、学習発表の場で問題を共有したり、級友や校外の友人とも議論を深めたい。また、小笠原だけに限らず、アルゼンチンアリの被害拡大というような本土の問題も発信していきたいと考えている。

3　参考文献、資料

・寺山 守ほか　日本産アリ類図鑑　朝倉書店　2014
・丸山 宗利ほか　アリの巣の生き物図鑑　東海大学出版部　2013
・WEB両爬図鑑　https://herpetology.raindrop.jp/cryptoblepharus_nigropunctatus

小笠原のマイマイを守るには

■杉並区立井草中学校　第1学年　**俵　　俊太郎**

1　「マイマイから気候と食物連鎖の関わりを考える」

⑴　個人テーマ設定の理由

私は、その土地固有の生物について興味がある。例えば、以前訪れた沖縄のやんばる地域は、暖かく湿っている気候で、コケやキノコがたくさん生息していた。コケやキノコを食べたマイマイ（カタツムリ）がヤンバルクイナに食べられるという、その土地に合った食物連鎖が生まれる。小笠原は、やんばると同じ「亜熱帯」に属しているためか、100種ものカタツムリが生息していることが分かった。年間降水量や地形の成り立ちなど、やんばるとは異なる点もたくさんある。小笠原の気候と密接に関わっているマイマイを切り口に、「食べる・食べられる」の関係にある生物の生態について探っていきたいと思った。

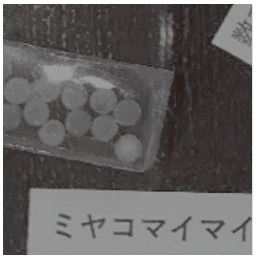
⑵　事前学習で学んだこと

小笠原ではマイマイがこれまでに110種以上見つかっていて、その90％以上が固有種であることが分かった。固有のマイマイを代表するのがカタマイマイ属である。詳しく調べると、マイマイは気温や湿度、住む環境に合わせて、進化してきたことが分かった。

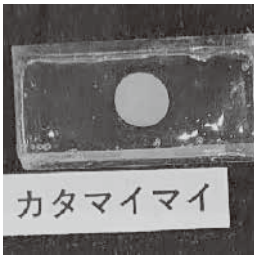
⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　カタマイマイの祖先

カタマイマイ属の祖先は、本州にいるマイマイ属である。写真1、2のように本州のマイマイ属は、直径約1.5㎜の卵を一度に20～30個産み、カタマイマイなどは直径5㎜を超える卵を2個ほど産む。



【写真1】本州のマイマイ



【写真2】カタマイマイ

【写真3】外来種除去装置

②　外来種の影響

カタマイマイ属の天敵は外来種を除くと、イソヒヨドリという鳥である。父島では、ニューギニアヤリガタリクウズムシなどの外来種のプラナリア類の侵入によってカタマイマイ属が絶滅の危機に瀕している。母島では、ニューギニアヤリガタウズムシの存在が確認されていないが、プラナリアの他の種が侵入している。外来種のプラナリア類の対策については、遊歩道の入り口に設置されている外来種除去装置使用の呼びかけなどが行われている。また、プラナリア類は海水や酢に弱いことが分かっているため、写真3のように外来種除去装置には、木酢が常備されている。現在、小笠原世界遺産センターでは、マイマイの人工飼育を行っている。また、マイマイの野生復帰は、2020年から巽島（たつみじま）や南島で行われてきた。

2　環境リーダー宣言

「希少な生物を守るためにできることを発信し、持続可能な社会づくりに貢献する」

この宣言にした理由は、世界的に見ても珍しい生物が人間の手によって連れてこられた生物によって失われかけているということを小笠原で知ったからである。過去に固有種が外来種によって絶滅した例はたくさんある。今生きている生物を、可能な限り生きた姿で未来につなげる上で必要なのは、小笠原の自然を体験した私たちが学校内外の発表会を通じて、情報を発信し続けることだと思う。たくさんの人と意見交換をして、みんなと一緒に環境について学んでいきたい。

3　参考文献、資料

・東京都立大学小笠原研究会　世界自然遺産　小笠原諸島－自然と歴史変化―　㈱朝倉書店　2021

五感で感じる小笠原

■杉並区立神明中学校　第1学年　**久　野　水　歌**

1　「人間中心ではなく様々な生物の視点で地球のことを考える」

⑴　個人テーマ設定の理由

人間中心の考え方でこのまま進むと、いつか地球には、生物が住めなくなってしまう。様々な生物がこの地球上に住んでいて、みんな一緒に生きている。人間以外の他の生物の目線で考えてみることによって、新しい発見や人間の幸せにもつながると思い、このテーマにした。

⑵　事前学習で学んだこと

①　固有種であるアカガシラカラスバトを外来種から守るために、外来種の捕獲、サンクチュアリの設定、餌木の増殖、人工繁殖、啓発活動がされている。

②　メグロやアカガシラカラスバト、オガサワラオオコウモリなどを食べてしまうノネコを一時的に猫待合所で保護している。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　小笠原村の人たちは自然を第一に考え、人を自然、人と人との関わりも大切にしている人が多くいた。小笠原での4日間を通して、小笠原の豊かな自然と生物は、そういう温かく自然を大切にする人たちがいるからこそ残っているのだということを学んだ。

②　現地で学んだことは、生物と人間の関係である。小笠原で私の知らない固有種だけでなく、外来種をたくさん見た。また、戦争で使われた飛行機や沈没船などもあり、人間がどれだけ地球を苦しめているか分かった。今も、海洋プラスチックでたくさんの生物がなくなっている。人間から見れば便利なプラスチックも生物から見ればどう感じるかを考える必要があると思った。

父島の豊かな海

戦争の跡

2　環境リーダー宣言　「私たちにできること」

人間は、勝手に世界を仕切っている。大昔は平和に過ごしていた生物もどんどん人間によっていなくなってしまい、国と国の境目に壁を作ったり、ビルを不必要に建てたり、破壊と殺戮の戦争を繰り返したり、プラスチックや放射能を海に流し出すなど、一部の人間の得になっても生物の立場になって考えてみれば苦しいことは想像がつく。私たち人間は生物の立場になって考えることで、未来を変えられるかもしれない。今すぐに私ができることは、早寝早起きや、寒いときは着る、暑いときは脱ぐ！の習慣を付けてエネルギー消費を少なくすること。プラスチックの使い方や捨て方をよく考えること。動物保護やアニマルウェルフェアの活動、そして私たち子どもで未来創りを考えていく。皆さんも一緒に取り組んでみませんか？

3　参考文献、資料

・絵巻とマンダラで解く生命誌　中村桂子

小笠原の固有種の保全活動について

■杉並区立高井戸中学校　第2学年　**玉　置　朱　璃**

1　「小笠原の固有種の保全活動について」

⑴　個人テーマ設定の理由

小笠原は美しい海で有名で、その海には小笠原にしかいない生き物がたくさんいる。海だけでなく、森や山などの自然にも特別な生き物が暮らしていることを知り、もっと詳しく調べてみたいと思った。さらに、それらの生き物を守るためにどのような取組が行われているのかに興味を持った。

⑵　事前学習で学んだこと

第1回目の事前学習会では、実際に小笠原に住んでいた小笠原村観光局の方から小笠原について詳しく教えていただいた。外来種が問題になっていて、外来種が入らないようにする取組をしていることを学んだ。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　ノネコの捕獲

父島には、希少な海鳥を食べてしまうノネコを捕まえる檻が500か所以上あり、ノネコ捕獲隊が毎日100か所程回っている。捕獲は、残り100頭を切るところまで進んでおり、捕獲したノネコは本土に送って里親に出している。生き物と自然の両方を守る、やさしい活動だと思った。

②　固有種の保護

4日目のネイチャーガイドで主に小笠原の自然について学んだ。小笠原には森林生態系保護地域があり、この地域には小笠原の固有種がたくさんいる。周りには材料にこだわった頑丈な柵で囲ってあり、5kmの距離で3億円かかったとのことだった。そのくらいお金をかけてでも小笠原の自然を守りたいという気持ちがとても印象に残っている。

森林生態系保護地域を示す掲示

2　環境リーダー宣言　「地球温暖化を防ぐ行動を毎日の生活で実践する」

小笠原を訪れ、海や森に住む固有種のことや、それらを守るための取組を知った。自然と生き物を守っていくことの大切さを感じる中で、地球温暖化が進むとこれらの環境も変わってしまうのではないかと考えた。そこで私は、使っていない電気を消したり、自転車で移動したりするなど、地球温暖化を防ぐためにできることを日々続けていきたいと思った。小さな行動を積み重ねて、未来の自然を守りたい。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

小笠原の固有種の生態、保全活動について

■杉並区立松ノ木中学校　第1学年　**宮　田　紗　羽**

1　「小笠原諸島の固有種の生態について」

⑴　個人テーマ設定の理由

小笠原諸島の固有種について知ることで、日本の他の地域でも生き物を増やしたりすることにつながると思い、このテーマにした。また、小笠原諸島の生き物について知ることは、その地域の歴史や気候についての理解を深められると思った。

⑵　事前学習で学んだこと

小笠原で行われている自然を守るための取組を学んだ。例えば、小笠原では鳥を襲うノネコを捕獲するための罠を置いている。罠で捕まえられたノネコは保護され、人に慣れさせた後に本土へ送り、里親に引き取られる。これは生き物を大切にする保全活動だと知った。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　小笠原特有の進化

小笠原の固有種は、生き物が小笠原の環境に合わせて進化していったものである。例えば、小笠原の固有種であるテリハハマボウという植物は、仲間のオオハマボウとは違い、山に生えている。オオハマボウの種は軽く、波に流されて広がっていくため海沿いに生えているが、テリハハマボウは山に生育域を求めて進化したため、種は重くなり、海水に浮かなくなった。

②　固有種の保護活動

現地ではアカガシラカラスバトの保護地域で行われている外来種の対策を学ぶことができた。外周には、外来種が入るのを防ぐためにナイロンとステンレスでできた頑丈な網が設置してあった。また、網にはネコ返しが付けてあった。さらに、内側に入るためには、靴の裏などについている可能性のある外来種を保護地域に入れないために木酢液をかけて除去する必要があった。

アカガシラカラスバト保護地域の外来種対策

2　環境リーダー宣言

「今いる生き物を減らさないために、個人でできることを周りに発信していく」

実際に小笠原に行って、今いる生き物がどれほど大切なのかを知り、個人でもできることから始めることの重要さを実感した。できることをしようと思ったが、自分だけではあまり大きな力にならないため、他の人にも伝えて自然を守る取組を広げようと思った。多くの人に環境学習などで自分の経験を伝えることで、今ある自然を守るだけではなく、生き物をもっと増やすこともできると思い、いろいろな人に発信していきたい。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課
・小笠原村ビジターセンター

アオウミガメの生態とそこから学ぶ海の環境問題

■杉並区立泉南中学校　第2学年　**斎　藤　心　愛**

1　「アオウミガメの生態と海洋ごみの現状」

⑴　個人テーマ設定の理由

最近のニュースでアオウミガメが海洋ごみを誤飲してしまうというのをよく見る。どんな種類のごみが、どのように海に流れ着くのか気になったため、このテーマにした。

⑵　事前学習で学んだこと

①　プラスチックごみは生分解されず、海に半永久的に残る。
②　海洋ごみは、プラスチック製のもの、釣り糸などの漁具、食品の容器、包装袋が多い。
③　ウミガメがこれらの海洋ごみに絡まったり、クラゲと間違って食べてしまったりして死亡してしまう危険性がある。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　アオウミガメ

小笠原で生まれた子ガメは約1年かけて1,000㎞も離れた日本列島の近くまで、海流に乗って旅をする。そこで海藻などを食べながら大きくなっていく。15～30年後、親ガメになり卵を産むために小笠原に戻ってくる。しかし、小笠原に戻ってくることができるのは生まれた子ガメのうち、ごくわずかである。

②　海洋ごみ

海流は、世界中の島や沿岸にいろいろな漂流物を運ぶ。漂着物は「海からの贈り物」と呼ばれ、海藻や魚は食料に、流木は薪や道具などの材料として利用されてきた。しかし、今では「海からの困り物」と呼ばれ、分解することのできないプラスチックごみが漂着物の大半を占め、世界中の海で問題になっている。

アオウミガメ

1頭のカメから出てきたごみ

2　環境リーダー宣言　「小さなことから海洋ごみを減らす努力をする」

実際の小笠原の砂浜は、思っていたよりもきれいで、海洋ごみに対しての島民の意識も高かった。しかし、よく見てみると小さなプラスチックごみがたくさん落ちていた。それは数時間や一日では取り切れない量で、全て取ったとしても、またたくさんの小さなごみが海から流れてくる。いくら島民の意識が高くても私たち本土の人間たちも海洋ごみに対しての意識を上げなければこれはなくならないと思った。そこで杉並区は海がないから関係ないなどと思わず、エコバッグを使用したり紙や木などの環境に優しい素材を選んだりするなど、小さなことからでも海洋ごみを減らす努力をしていこうと思う。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

自然と人の共存

■杉並区立西宮中学校　第2学年　**小　林　真由香**

1　「環境保護と持続可能な生活について」

⑴　個人テーマ設定の理由

このテーマを選んだ理由は、小笠原諸島の水資源が限られていると知ったからである。また、限られた資源をどのように管理するのかという問題は、地域社会だけではなく世界的な水問題にも関連しており、将来的な環境保護や持続可能な生活についての意識を高めることができると思ったからである。

⑵　事前学習で学んだこと

私は環境リーダーとは何かということを改めて学んだ。現地で学び、課題を見付け、参加するだけでなく、それを誰かに伝えることが大切だと分かった。私たちが自然についての理解を深め、多くの人に環境のことを考えてもらいたいと思った。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　サンクチュアリ

私はサンクチュアリのことが印象に残っている。現地では、人間の活動や開発によって、多くの自然環境が脅かされている現実があると痛感させられた。そして、島の美しい環境を守るために、一生懸命取り組む人々の努力に触れ、自然の大切さとその保護の必要性を深く学んだ。私たちが自然を大切にし、守る責任があると強く感じた。

サンクチュアリでの利用人数カウント装置の様子

②　小笠原の人々

地域の人々の温かさや伝統、協力の力も学んだ。小笠原の人々は伝統や文化を大切にしながら暮らしていることを知り、地域社会のきずなや共に支え合う精神の重要性を深く実感した。環境保護には多くの人の努力と継続が必要である。そして、自然だけでなく、人と人とのつながりや地域の価値を大切にすることの重要性を学ぶことができた。

2　環境リーダー宣言　「周りの人と一緒に自然への意識を高める」

私は小笠原で自然や環境の大切さを深く理解した。今後は、学校の生徒などに自然の素晴らしさや環境保護の必要性を伝える。例えば、ごみの分別、節電や節水を心がけること、使い捨てのプラスチックを減らすことなどである。また、学校や地域の清掃活動に参加し、環境についての啓発を行う。周りの人も自然や環境を大切にする意識を高めていきたい。このようにして、環境リーダーとして自然の素晴らしさや環境保護の必要性をみんなに伝えていく。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

小笠原の生物の保護について

■杉並区立西宮中学校　第1学年　**ボーゲンシュルツ　ジャスパー海**

1　「小笠原に生息する生物とそれを守るための取組」

⑴　個人テーマ設定の理由

主に二つある。一つ目は、小笠原独自の生態系について詳しく調べたかったからである。二つ目は、環境問題や外来種等の持ち込みのせいで、小笠原の固有種の現状はどうなのか、小笠原の自然環境にどのような変化をもたらすのか調べたかったからである。

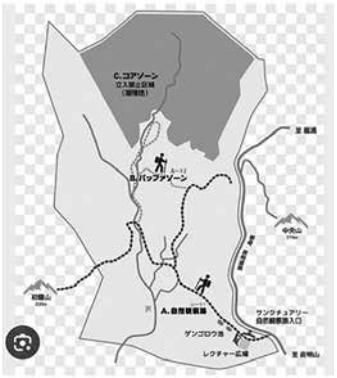
⑵　事前学習で学んだこと

私は、ネイチャーガイドや現地の人への質問を考えるときに、小笠原に関する質問をするだけでなく、小笠原の自然に対する思いや意見を引き出すような質問を考えるようにした。小笠原で実際に住んでいる方々の考えを聞くことで、より小笠原についての理解を深められるようにしたいと考えた。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　小笠原で動植物が生きるためには、環境に適応できる力が必要だということが分かった。小笠原の固有種の多くは、他の地域から海をわたってきたものだが、元々いた地域と違う環境であり、海洋島でもあるため、海流移動等、変動する気候条件にも耐えていかなければならない。そのため、小笠原の生物はその環境で生きていくために独自の進化を遂げていったことが、ネイチャーガイドでの説明や散策により知ることができた。

②　小笠原に実際に行ってみて、小笠原の固有種を守るための取組について知ることができた。例えば、小笠原には絶滅危惧種のアカガシラカラスバトという鳥を守るための「サンクチュアリ」という保護区域がある。【写真】を見てみると、保護区域がかなり広いということや、小笠原では固有種の保護に対しての取組がとても整っていることが分かった。



【写真】サンクチュアリの範囲

2　環境リーダー宣言　「一人ひとりの意識や行動が生物の多様性を守ることにつながるように、自分たちができることを地域を通して発信する」

私は、小笠原に実際に行ってみて、様々な特徴をもった珍しい生物がいることに驚くとともに、それらの多くが絶滅の危機に瀕していることを知り、黙ってはいられない気持ちになった。そこで私が考えた生物の多様性を守るために大事なことは、地域のつながりを有効活用することである。すでに様々な立場の関係者が主体となって、それぞれの地域の自然や文化等の特性を生かして、生物多様性の保全に役立つ活動が数多く行われている。中学生でもそれは不可能なことではない。友達や親戚、知り合いだけでなく地域での取組や活動を通して発信することで、より多くの人からサポートを受けながら、保全活動に取り組んでいきたい。

3　参考文献、資料

・Sancutuary小笠原　https://sanctuary-ogasawara.com/

素晴らしい小笠原独自の自然を今後残していくために

■杉並区立高円寺学園中学部　第3学年　**今　井　　力**

1　「外来種との付き合い方」

⑴　個人テーマ設定の理由

近年、都会でも外来種がよく話題になっている。自分自身、最近外来種をよく見かける。そのため、世界自然遺産である小笠原の環境保護に取り組んでいる現地の人々がどのように外来種と関わっているのか気になったから、このテーマとした。

⑵　事前学習で学んだこと

外来種駆除が人間のエゴにならないためにも、小笠原ネコプロジェクトのように、外来種をただ駆除するのではなく、外来種を捕獲し新たな生活の場を与えることは自然保護の方法として大切だと感じた。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　ノネコ対策

4日目にネイチャーガイドの方と話すことができた。ノネコの罠は他の生物がかかってしまわないようネズミの罠の横に設置をしたり、一日ごとに見回りをしたりして、捕獲した生物を殺してしまわないような努力をしているということが分かった。自分たち人間が放ってしまった外来種の責任をしっかりとろうとしていることが印象的だった。

②　グリーンアノール対策

現地では多くのグリーンアノール対策の罠を見ることができた。罠にはオガサワラゼミや鳥混獲防止の仕切りや蓋を開きにくくする工夫がされていた。写真は、実際の罠で地面近くに住んでいる生物を混獲してしまわないように、罠を地面から離れた木に設置していた。これらを見て在来種を守ることを大切にする小笠原の人々の思いを感じることができた。

【写真】現地のグリーンアノールの罠

2　環境リーダー宣言　「外来種について発信し多くの人に知ってもらう」

小笠原では、在来種を守るだけでなく、外来種の命も大切にしているのが印象的だった。杉並区に住んでいる人々も外来種が元の環境に影響を与えてしまっていることは分かっている人がほとんどだと思う。しかし、小笠原の人々のように放たれてしまった外来種の命にも責任を感じている人は少ないと思う。外来種は悪者というわけではない。そのため、外来種の保護というものをもっと学校での発表などを通し発信していき、多くの人に知ってもらい意識させることから始めていきたい。

3　参考文献、資料

・小笠原ネコプロジェクト！　https://www.ogasawaraneko.jp
・マイマイの楽園～小笠原マイマイを守る取り組み～
公益財団法人東京動物園協会　葛西臨海水族館

小笠原の生態系とその変化について

■渋谷教育学園渋谷中学高等学校　第1学年　**綱　島　実　咲**

1　「本土の気候との比較や、環境問題による生態系の移り変わり」

⑴　個人テーマ設定の理由

小笠原諸島は東京～大阪間の距離よりもずっと離れており、そのため環境も杉並区と大きな違いがあり、生態系の成り立ちも根本から差があると考えた。また、昨今の環境問題が小笠原の生態系に与えている特徴や解決策についても考えたい。

⑵　事前学習で学んだこと

小笠原観光局の方の話や班での学習を通して、小笠原諸島という場所について少しイメージをもつことができた。班で設定したテーマの「自然環境と生物の関わり」と、個人のテーマとの間で「本州と小笠原という別の環境では生態系にどのような違いがあるのか」というつながり方を見いだした。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　小笠原の文化

現地の独特の文化や、人々の距離感の近さがとても印象に残った。ネイチャーガイドの方やシュノーケリングのインストラクターの方、宿の方にもとても気さくに話しかけていただき、行程がより充実したものになったと感じている。また、南洋踊り体験やフラダンス体験では、私たちから交流を深めることもできた。

現地の人の手により守られている小さなウミガメ

②　人間の関わり方

現地では、希少生物に対する人間の関わり方に対して学ぶことが多くあった。よく「人間は一切干渉するべきではない」という考え方を聞くが、ものによっては人間による保護がないと絶滅してしまうかもしれない生き物も多くいる。適度に人間の力を使いつつ、過度な伐採や開発は控えて、生態系と環境を守っていくことが重要だと感じた。

2　環境リーダー宣言　「共に支えあって成し遂げる、より良い自然との共生」

昨今の環境問題の大半は、確かに人間の成したことの帰結だが、かといって何も手を出すべきではないというわけではないように思う。小笠原諸島では、現地の小学生が生まれたてのウミガメを保護したり、貴重な鳥類のいる地域を網で囲ったりするなど、多くの取組が見られた。このように自然と人間とでうまく協力し、外来種を飼ったりしない、ペットを捨てたりしないなど一人でもできるような小さなことから環境問題の解決に貢献したい。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

小笠原に流れ着く海洋プラスチックごみの量と産地について

■東京大学教育学部附属中等教育学校　第2学年　**藤　井　誠　人**

1　「海岸に落ちているプラスチックごみを調べることで、海から流れてくるプラスチックごみの量や材質について調べる」

⑴　個人テーマ設定の理由

プラスチックごみが流れてくる量について、海岸に落ちているプラスチックごみの量を調べることで予想することができると考えたからである。また、どのようなプラスチックごみが、どれくらいの多さで流れるか調べることで推測できると考えたからである。

⑵　事前学習で学んだこと

外来種の生物について、その外来種も生活できるような場所を作っているという活動をしていることを知り驚いた。シュノーケリングをするときにも、海洋プラスチックごみを観察することができると分かった。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　ビーチクリーン講習を行った扇浦海岸にも、たくさんのプラスチックごみが落ちていたが、ガイドさんの話で、観光地として有名な扇浜池にさえプラスチックごみが流れ着いてきて落ちていることが分かった。そして、このようなプラスチックごみをすべて拾ったとしても、高波などが来てしまうと、すぐにプラスチックごみが流れてきてしまうと分かった。

海外から来たと思われるごみ

②　ビーチクリーン講習で落ちていたプラスチックごみを1㎥の袋2袋分ぐらい拾ったが、それでもまだ多くのプラスチックごみが落ちていたため、大量に流れ着いていることが分かった。また、プラスチックごみは海外だけではなく、日本からも多く流れ着いていることが分かったため、自分たちのポイ捨ても環境に影響を与えているのだということを感じた。

2　環境リーダー宣言

「自分の身の回りの人（友達など）に小笠原で学んだプラスチックごみの情報を共有し発信する」

不意にプラスチックごみを落としてしまう人や、ごみ箱がないからといって故意にポイ捨てをする人をたまに見かけることがある。このようなことは、プラスチックごみが海に及ぼす影響を知らないことで起こることだと自分は考える。そのため、「ポイ捨てされたプラスチックごみは街中の水路を通して、川や海に流れてしまう」という情報を多くの人に共有するために、まずは自分の身の回りの人と話をするときに、プラスチックごみの話題を出すなどして、日常の会話を通じて、小笠原で学んだことを伝えたいと思い、このような宣言にした。

3　参考文献、資料

・小笠原村パンフレット　小笠原村産業観光課

環境保護と小笠原諸島の観光客との関わり

■東京大学教育学部附属中等教育学校　第2学年　**峰　田　百　々**

1　「環境保護と小笠原諸島の観光との関わり」

⑴　個人テーマ設定の理由

私たちは、学校で美しい世界遺産や観光地について学ぶ。その際に必ず教わるのが、環境保護についての取組や課題である。富士山のオーバーツーリズムによる環境悪化などを通して、観光客のマナーや文化による環境悪化や、地域住民や交通機関に支障が出ることがあることを学んだ。そこで、世界自然遺産に登録されて年間1万人以上の観光客が訪れる小笠原村にはどのような取組や課題があるのか知りたいと思った。

⑵　事前学習で学んだこと

自分で決めたテーマに沿った下調べでは、エコツーリズムが小笠原村の観光振興の柱になっていることを学んだ。また、小笠原村観光局の方の話から23区と小笠原村の交通や人口、年齢層などの違いを知り、さらに小笠原村の歴史や文化について関心が深まった。

⑶　現地での体験を通して学んだこと

①　現地の人々と観光業

私は、小笠原村では水産業が主で、観光業には多くの村民は関わらないものだと思っていた。しかし、現地でガイドの方に話を聞くと、小笠原村で観光業に関わる人はとても多いということが分かった。また、その一方で、今より観光客が増えることを村民の方々はあまり望んでいないということも分かった。

小笠原の海

②　ネイチャーガイド

小笠原諸島では、ネイチャーガイドの方が同行しなければ立ち入ることのできない場所やガイドなしでは楽しめない場所が多く、観光する上でガイドをつけたりエコツアーに参加したりするのが必須になっていることが分かった。つまり、小笠原では、観光客にマナーを守って楽しんでもらうと同時に、環境のもろさと美しさを伝え、環境問題について訴えかけているのである。

2　環境リーダー宣言　「エコツアーを利用した観光の魅力を発信していく」

私はこれから旅行する際、事前にエコツアーを利用できるか調べてから訪れることにしようと思う。なぜなら、エコツアーを利用し、その様子を様々な機会で発信することで少しでも興味をもつ人が増えれば、その観光地の環境問題や土地の魅力が徐々に広がると考えているからである。

3　参考文献、資料

・小笠原諸島の現状　https://www.mlit.go.jp/common/000985457.pdf

中学生小笠原自然体験交流事業は『杉並区次世代育成基金』を活用しています

『次世代活用基金』とは、次代を担う子どもたちが、自然・文化・スポーツなど様々な分野における体験・交流事業への参加を通して、視野を広げ、将来の夢に向かって健やかに成長できるように支援するための杉並区独自の仕組みです。

平成24年の創設より、寄附者の皆さまからの継続的なご支援をいただくことで、多くの子どもたちに貴重な体験を提供することができています。寄附者の思いが基金を通じて子どもに託され、その子どもたちが大人になり、さらに次の世代を育んでいく。この「支援の循環」が杉並に根付き、希望に満ち溢れた未来へとつながるよう、ご支援をお願いいたします。

次世代育成基金への寄附・問合せ先
杉並区子ども家庭部　児童青少年課　青少年係
〒167-0051　杉並区荻窪1-56-3
TEL.03-3393-4760
FAX.03-3393-4714

「杉並区中学生小笠原自然体験交流」
令和６年度 派遣生徒報告書

令和７年７月発行

登録印刷物番号
07－0012

編集・発行　杉並区立済美教育センター
〒168-0064　杉並区永福4-25-7
TEL.03-6379-3521